

フローベールとサンボリスム（１）

——同時代人、ボードレール——

FLAUBERT ET LE SYMBOLISME（１）

——BAUDELAIRE, UN CONTEMPORAIN——

博士課程 仏文学専攻３年

浜 田 泉

IZUMI HAMADA

序

フローベールは前代のロマン主義の養分を多く吸って、そこから新たにリアリズムの芸術を切り開いた作家であり、モーパッサン、ゾラ以下自然主義作家を輩出した。（しかし彼はこの派の始祖と見られることは嫌悪した。）晩年近くには、その存在自体の価値を否定気味であるにせよ、バルザックの価値を若年期には正当に認めていた。そして「人間喜劇」の作家をネルヴァルと同様に幻視家と最初に看破したのはボードレールである。ロマン主義と象徴主義^{サンボリスム}の絆も見過ごせないものであるが、そのボードレールが開拓したとされるサンボリスムが、ヴァレリイの言うように、ある時代、流派の範囲外に存在する文学運動とするなら、当然、その核にあるもの、精神の探求こそ重要であろう。この論は生涯一篇の詩も書かないフローベールをサンボリスム詩人と同列に加える意図はない。彼と共に同時代人ボードレール、後の世代マラルメ（次稿）の姿を探りつつ、そこから興味ある軌跡を描く二つの散文・詩精神を通して、19世紀近代の精神を確かめてみたい。

×

×

×

本稿では、ボードレールが時代の中で凝視したものを、群衆と神の周辺に探る。今日でも、少しも色褪せないボードレールの肖像が得られる。先ず何にも増して孤独な人間であり、全てに対し、独力で向い、立つ。彼は騒乱と汚濁の時代に、自ら、神を創り出し、人間たち、——不幸な人たち、悪しき者らとの独得な関係を結ぶ。ここでは、フローベールに起きたと同様の事態なのだが、ロマン派の最高度の達成である緊迫した想像力が彼を解き放ち、又、それは余りにも彼の翼を締め付ける。人間と神と、この二つのものとの交渉の歴史、無論、人間たちとの生活の交流の内に、神を祈求する場合が多いが、一応ここで、彼の神に対する姿勢と、隣人、群衆へ寄せる関心の内容を具体的に辿ってみる。それが彼の中で象徴詩へとどの様に高まって行くかが問題であろう。

I

＜群衆に^{ゆあ}浴みするということは、誰しにも許されていることではない。群衆を楽しむことは一つの芸術である。……＞（「群衆」）

ボードレールの言うように、自己を失うことなく、群衆を享受するには、ある資格が必要だ。群衆、即ち、自分の外に溢れている、他の人間たちによる別世界。その流れに、交わりながら、そうする自分を、もう一人の自分が見ている状態が望まれる。ボードレールは、群衆の流れの豊満さに酔い、思わずその中で、放心している。

＜群衆の中にいる快感とは、数の増加を楽しむ気分の、神秘的な表明である。＞（「火箭1」）

数の増加が、彼の陶酔を幾重にも、舞踊の輪のように次第に広げて、形成して行く。この数の幸福な氾濫、しかし、その一点に目を凝らすと、彼の感覚は忘我から覚め、生き生きと働き出す。ボードレールは自己の孤独の勁さと拮抗する対象に、激しく渴えている。その重みと痛みに深く突き刺さって来るものを、全身で求めている。それは又、詩人が自己の孤独を確実に背負い、苛まれて、初めて可能なあらわれをする。ボードレールは、分身であり血縁と信じる、彼、彼女らに、想像力の世界で呼びかけ、共感を訴える。彼の心の厳格な自動機械装置は、彼ら群衆、各々の実体と、靈魂以外の世界、即ち、物質的、現実世界で、直接交渉を持つことを断じて許可しない。彼に於いて、直接的にとは、群衆一人一人の表面を一瞥しただけで、その個人の内面を感知する、その格別鋭い能力を用いつつ、何より自分自身を、同類という名の獲物を漁る高雅な獵犬の悲哀に満ちた眼差しそのものと化すことであり、暗い嵐の中の雷光にも似た、一瞬の火花に、心を果て迄、押し進めることである。そしてその一瞬の印象から、それが由来した一つのその人間の虚構の個人史を、詩人は想像裡に織り成し、遂には或る決定的な象徴の高みへと自我共に攀じ登る。危く、悲劇的な登攀だが、この行為に於いてのみ、正しく、彼も、名も無き対象も生き、永遠の石に刻まれるのだ。そしてこれが韻文でも、散文でも何時に変わらないボードレールの詩作課程である。

、そこには、彼の無意識の内に、もしその対象に触れて、自身のイメージと相違する向ものかを発見したらと、怖れる気持がある。ボードレールは自身の感情に絶えず、酔っていることが、彼の感性を自覚めさせ、詩作の源泉に近づくことを承知している。従って、対象はまず彼の心の中に予め形を成さず、漠とした期待としてある。そしてそれと呼応する現実が姿を現わすや否や、彼の詩想は発火する。この燃えさかる想像力の饗宴に、水をさす「事実」には、目を向ける訳はない。ここで、ボードレールは、自ら作り上げた虚構の一場の中でさえ、観察の人となるが、奢れる認識の垢に染まらずに、澄むのは、彼の洞察が全身をあげた真率なものだからだ。

＜^{いらか}覺の波の続く彼方に、私は、齡たけて、既に皺のできた、貧しい、常に何かの上に身をかかめ、決して外へ出ない、一人の女の姿を認める。その顔つき、その服装、その仕草、殆ど取るに足りないものから、私はこの女の物語を、というよりむしろ、伝説をつくり上げた。そして時おり、私は、涙を流しながら、自分自身に、その話を語っているのだ。＞（「窓」）

閉じられた「窓」を外から覗き、空想を欲しいままにするが、開かれた窓には、彼の関心は後退する。心惹かれる寡婦の後を追っても、別段交渉を持つ訳ではない。祭日の老いた辻芸人にいたく感動するが、その小屋の中には踏み込まない。彼は内心彼らに寄せた期待が裏切られるのを怖れている如くである。自身の切実な感傷が白日のもとに晒され、当の相手の困惑や反感を呼び、笑い者にされるのが辛い。ボードレールは、ある一篇の中で、この心の動勢を、微妙な具合だが、相手を思いやる情に帰している。即ち、彼が辻芸人の小屋に立ち居らず、余計なことを尋ねない、この臆病の理由は、「彼を辱しめることを怖れた。」故だと言う。そしてこの情すら、人々の笑いを招くに違いない、と断っている。だがそれともう一つ、やはり彼自身の側に深く関わる、心の羞恥も、悲しい確執のまま、この場には、潜んでいるように思われる。いずれにせよ、彼は黙って立ち尽くし、感動に見を任す。

＜しかし、この男は、何と深い、忘れ難い、眼差しを、彼の忌むべき悲慘の数歩前でその揺れ動く波がびたりと止まっている、群衆や燈火の上に、さまよわせていたことだろう。私はヒステリーの怖ろしい手で、喉が締めつけられるのを感じた。そして両眼は、落ちることを望まぬ、あの反抗的な涙によって遮られるように思えた。＞（「老辻芸人」）

「窓」を見つめる時と同様の感情である。彼のこの内奥の激しい感情が、真実に吐露される場合は、詩の中に於いてのみであり、現実では、相手に恥をかかせるのを恐れつつ、同時に、己れの赤裸な心情をも隠した。詰る所、ボードレールの詩作とは、人目を忍ぶ信仰に近いと言えるだろう。その詩作の為に、敢えて、この辻芸人の生涯の事実を求めなかった、と迄言えるのかもしれない。何故なら、その祭りの帰路、この一介の老人に、既に文運の盛りは疾うの昔に過ぎ、今や世に捨てられ、落魄した詩人の影像を見てとり、それを自分の心に焼き付け得たからである。まさに彼は詩作の源泉になる、心の「確実な糧」を手にしたのだった。「窓」の末段には、ボードレールの、この覚悟の毅然とした表明がある。

＜そして私は、自分自身以外の者の中で、生き、悩んだことを誇りつつ、眠りにつく。おそらく、諸君は、私にこう言うだろう。『君にはその伝説が真実である確信があるのかい』と。それが、私の生きるのを助け、私の存在していることや私が何ものであるかを感じ得るのを助けてくれるならば、私の外に置かれた現実が何でありえようと、どうでも良いではないか。＞

これより以外には生きられない、ボードレールがおり、その生理は、良く自覚されたロマンティシズムの軟やかさと相通じている。多分同じ土壌から、フローベールにも、「純な心」の老女フェリシテに捧げる、全一にして無比な愛情表現がある。それは愚かなカリカチュアとの中傷や誤解をも厭わないほど、激しく強いものである。

ボードレールが、群衆の中で、心動かされるのは、とりわけ苦行する者、不幸な者たちであるのは明らかだ。それも自分の姿を彼らに投影するからに他ならない。彼は彼らによって触発される自身の感情を愛している。そして今見て来たように、その衝撃から受ける心の作用を、対象である彼らに語って聞かせるほど、矛盾した、恥知らずなことではない。全身で不幸の重圧に耐え、犠牲者の風体を余儀なくされている、一個の沈黙する弱き存在に対しての神の目から見た、最大の礼を失した行為と見たのであろう。彼の個人主義は、同胞愛を叫ぶ厚顔無恥な、そして、不幸な人々にとっては、何よりの加害者、侵入者である輩より、遙かに繊細で優しみに満ち、己れの節度を心得たものである。彼ら同様、彼も又、一人の心弱い不幸な詩人に過ぎず、それをボードレールは身に沁みて知っている。しかも互いの領域に踏み込むことの不可能さこそ、この近代都市社会の厳然たる宿命であり、ボードレールの詩の憂鬱を醸成し、色調を決定する最大の病ではなかろうか。パリの憂鬱一卷は、「一人になることができぬというこの大いなる不幸……」（ラ・ブリュイエール）を免れた、ボードレールが「一人で居ることの不幸」を折り折りの情景に託して歌ったものが多い。

神なき19世紀で、ボードレールは、街道の心に残る不幸な人たちに、殆ど殉教者の思影を求めたと言える。実は、彼らを、愛情から来る直観によって理解し、その共感の情を、詩の世界で純化し培養するボードレール自身こそ、19世紀のその類を代表する稀な人物であったが、その周辺はⅡ章で述べたい。

とまれ彼の＜魂の聖なる売淫＞とは、一人にとどまりながら、興を寄せるに値する全ての人の胸中に自由に出入りすることを意味する。サンボリスムの古典的定義のようでもあるが、ボードレールは、パスカルの如く、部屋の中に一人で留まってもいられる人である。彼は自己の孤独に耐えられ得るから、そのまま、群衆を、他者として純粹に享受できる。あるいは、神までも。他方、一人で居ることが元来不得手な俗衆は、動揺変化の中に、騒々しく、幸福、というよりその宿酔を探し求める。彼らの群衆頭望は、明らかに、惨めな自分の状態を忘れる為起り、功利的な標語、*Fraternité* を掲げた輩と同様、自己を失っている点で、詩人の見地上、悪しき売淫の標本であろう。彼らは、又、その精神構造の仕組から、必然的に、群衆の中の不幸な一隅へは、軽薄で冷淡な好奇心しか持ち得ない。＜おのれの孤独を眠かにすることができない＞想像力の衰亡が、他の苦痛を前にして、その鈍感さを生むのだが、この衰亡は、空虚より以上に、人間のある罪、近代文化の底に巣喰う、最も許し難い罪惡の証しと、彼の目には映じた。

ボードレールにとって、群衆とは、そのまま、不幸も汚辱も、祭の晴着と襦袢も、全て包含した、人間界の行進に置き換えられる。如何なる魂の売淫も試みない人間たち、＜箱のように閉ざされたエゴイスト＞や、＜軟体動物のように監禁された怠け者＞には、先の狂奔する二手の連中と共に、決し

て知ることのできない、この世の総体であり、真理の終の栖と映った。そこは、外界との魂の遍き交信によって、ボードレールが、比類なく自由になれ、生きる労苦を忘れ去り、自己を回復する地点だと言えよう。又、別の情景（「黄昏」）では、この世の悲惨さえもが、夜の帳の中で、苦痛に満ちた彼の想念を静かにあやし、その詩作を無限に鼓舞するのが見られるだろう。

II

現代人である我々が、空気の異和感無くして、その詩集を繰れる詩人は、ボードレールを以って嚆矢とする。この底に連綿とつらなる或る一つの意識は彼の創り出したものである。

神（キリスト教）の社会状況に於ける消失。政治（革命）への期待の喪失。彼は、自らの内に、独自の神の観念を所有していたが、政治、社会の進歩、変革を徹底して信じていなかった。時代の風潮は、神を持たず、世界の進歩を、主に無知と無自覚から安売りされ、科学の発達をそれを増長させる、思想の貧困により信じた。詩人によれば、楽天的思想とは、単に怠け者の、時代に即した症状以外の何物でもない。だがこの支配する風土が、ボードレールやフローベールの住んだ百年前のものであり、未だ延長線上にある我々のものである。彼は自分と神との関係に深い確信があった。ブルジョワ憎悪と共に、政治に怒り、幻滅した。日く、神の不在、政治の空虚、これが彼の時代から引き継いだ、今日の現状の、そもそもの基調であり、今日では余りに自明の事実となって、改めて問い直されることも少ない。ボードレールが新鮮なのは、確かに、一人の人間として、「原始キリスト教徒のように」、もう一度、信じ直し、激しく怒ったからに違いない。彼は、文明の真の姿を＜原罪の痕跡の減少＞に見てとった。では、何故、彼一人が、遙か太古の人間の原罪をその身に意識し得るほどに、罪人として己れを指定できたのか。神の観念の死んでいる時代に。この問いには、ボードレールの全生涯が立ち上がって答えるかのようだ。彼は、どうにもならない宿命の罪深さを自覚しつつ悪夢のような生活を送ったが、不幸の堅固な手ざわりを忘れることはなかった。それは恐ろしい実感であった。

＜（私がどれほど、審美上、自分を近代的と考えているかを白状する勇氣を持ってみよう。）不幸というものが必要なのだ。——私は「観喜」が「美」と結びつかないと、主張はしないが、「観喜」は「美」の最も通俗的な装飾物の一つであるとは述べる。他方、「憂愁」は「美」のいわば卓越した伴侶であり、私には従って、（私の脳髄は魔法にかけられた鏡なのだろうか。）不幸の存在しないような「美」の型は殆ど考えられないほどである。……＞（火箭10）

自分や他人の不幸の味わいに通じることは、既に罪の匂いがする。それは自分の骨をしゃぶる行為である。天使の翼が招く、大いなる神の導きに沿う道ではない。だがこれ無くして、彼の美や詩は成立しない以上、彼は自らを＜近代的＞と意識しつつ、業を荷って歩み続ける。この世に点在する不幸の色彩とは、神の遺した原罪の、直截で鮮かな痕跡に他ならないから、逆に彼は、見失われた神を探

すため、その痕跡を色濃く留めて、殉教していると思える人たちを求めたのだ。失寵でさえ、神の愛の手厳しい確認であり、かつては愛されたことの証明であり得る。原罪を背負う人間は、この世の苦悩に耐えてこそ、初めて神の存在を感じ取れるかの如くである。ここに、ボードレールは、神を是非にも見い出す必要がある。だが彼の宗教感は次の通りである。

＜例え、神が存在しなくなる時でさえ、「宗教」は未だ「聖なる」、「神々しい」ものであるだろう。＞（火箭1）

＜神は、統治するにあたって、己れが存在する必要さえない、唯一のものである。＞（同）

以上のように、彼は独自の発明になる神の観念を所有している。彼は、どのような行動を起す時でも、何かに見張られて緊張する意識を必要とした。ある時は、求め、すがり、又、ある時は、叱責し、罰する存在、唯一無二の絶対的存在を是非にも望んでいる。又、いつ迄も、看取られていたい願望がある。何も無い、心の広大な空き家の中に居る状態、——虚無——を怖れ、何かが沸点を越してしまった後、なお鈍く、一定に気化し続ける状況——倦怠——が耐え難い。虚無や倦怠の中では、彼の神は住み得ないから、そこに永劫の退屈が始まる。見放され、為すすべもない、幼年時代の——父が死に、母が消失（再婚）した、子供の絶望感の、更に変形し、大きく膨れあがった再来と言って良いのだろうか。これは彼の生涯を通じて続く、固有の観念であるが、もう嫌悪の余り、逃げ出したいほどだ。しかし縛りつけられ、呻くように＜深淵＞より叫びながら、彼は辺りを見回している。

この時、彼の好む画布がある。

＜地獄の熱病にひきつる指先＞で、老いた娼婦と暗い顔の詩人らが、安宿の賭博に吸い寄せられている。それを大きな灯が赤々と照らし出す、不潔に汚れた光景。——このある夜の夢の中で、彼はその暗い洞窟の片隅に自分自身が一枚加わり寒気を感じつつも、おし黙って肘つき眺め、彼らを羨んでいる事態を目撃する。

〔この連中のしぶとい情熱が羨しくて、
年老いた淫売たちの不吉な陽気さも。
また、昔の名誉だの、昔の美貌だの、私の面前で、
野卑な大声に取引するのも、それぞれ羨しかった。〕

そして私の心は怖れた。その哀れな人間たちを羨んでいるので。
彼らこそ、口をあけた深淵にひたぶるに走り寄り、
自分の血に酔って、結局は、死より苦悩を選び、
虚無より地獄に惹かれる奴らなのに！〕（悪の華——「賭博」）

心の空隙状態を厭い、ある関係の中から確かな手応えを切望してやまない生理に潜んだ、暗黒への憧憬模様が、この図に他ならない。彼の思惟を想えば、実際の死や虚無の中では、他者——神との交流が途絶えてしまうことがわかる。彼は生々しい実体を求めている。死や虚無に「賭け」ても、そこにはただ何も起り得ず、惨めな現状を脱せないからだろう。別の一篇で、死後、墓地から引き出されて、土地を百姓さながら耕す骸骨の絵図を見て、詩人は「骸骨」たちにこう尋ねずにいられない。

〔おまえたちは証明しようとするのか

（余りに苛酷な定め、恐ろしく、明らかな象徴図である！）

墓穴の中でさえ、約束された眠りは、

確かなものでないことを？

我々に対して「虚無」も又、裏切り者であることを？

全てが、「死」さえもが、我々を欺くことを？

そして、ああ、永劫にわたって、

おそらく、我々は、どこかの

未知の国で、粗い大地の

皮を剥ぎ、重い鋤をふるって、

我々の血まみれの裸足の下、

耕し続けねばならないだろうことを？〕

（同——「耕作する骸骨」）

死や、死後の眠り（虚無）が裏切り者であると、推論するのは、キリスト教徒としては、異風であり、失格である。死が、祝聖され得ず（トロワ・コントのフェリシテや聖ジェリアンの死が、ここで言う祝聖の最も美しく達成された姿であろう。このカトリシズムの典型的な美と思念が鮮かに描かれた作品が、異教徒を標榜するフローベールによって書かれたことは意味深いものがある。）詩中で、死後、天国も地獄も存在しないと思ひ描くことは、無神論の風土に近づく。ボードレールにとって、天国や地獄を信じるのは、人間の精神力の証しのはずであった。ところが、この古ぼけた絵図に於いては、死後、形而上の何らの装飾も施されずに、人間が、骸骨のままの姿、精神性をまるで剥奪された単なる物質のまま、墓地から呼びもどされている。そして、生の有限を越えて、無限の永劫に、今度はより赤裸な「皮を剥がれた」人体を晒し、苛酷な労働に服さねばならない。生と死と、二代にわたる苦役を通して、余りに陰惨な人間の運命が呈示される、この白けた風景の中、むしろ、怖しくも、真実そのものと信じたい、形而上の地獄の不在が、かえってボードレールを脅す。

この種の死のイメージに要約されるように、「死」が単に酷薄であっても物理であり、それ以上（天国）でも、以下（地獄）でもない恐れから、彼は現世の「苦悩」douleur に執着するだろう。

「虚無」néant の惨憺より、「地獄」enfer の生々しさを選ぶように。

人間を見て、すぐその骸骨が浮き出て来る、ボードレールの生理的連想作用は、同時代人、フローベールの「悲しいグロテスク」の感覚に相通じていると思われる¹⁾。神への信仰に忠実だった中世が、多くの、骸骨による「死の舞踏図」を流行させたように、ボードレールも現代人の死の舞踏図を書かざるを得ない。ここでは前と逆に、死や虚無への熱狂が、いささか反語的と思えるほど、高調してうたわれる。

〔彼女の深い両眼は空と闇から成って
頭蓋骨は、手際よく花々をあしらひ、
脆い脊椎の上でしどけなく揺れ動く。
狂おしく飾り立てた虚無の何という魅力！

肉に酔う恋人たちのどいつらも、おまえをカリカチュアだと呼ぶだろう。
人骨の持つ、名も無いその優美さを理解できずに。
丈高い骸骨の女よ、おまえこそ、
私の好みに一番しっくり合うものだ！〕

〔鼻欠けた舞姫よ、抵抗し難い娘子よ、
不快な顔向けるこの生ける踊り手たちにこう言ってやれ、
『……………

セーヌの寒い河岸から、ガンジスの燃ゆる岸边まで、
死すべき定めの人間の群れ、踊り狂っているけれど、
黒いラップ銃同様、不吉に口をあけている、
「天使」のラップを天井の一角に見ることもない。

あらゆる風土、如何なる陽のもとでも
「死」はおまえ、滑稽極まる「人類」の、ねじくれ踊りを嘆賞するが、
時々おまえのように^{ミルマ}没薬を燻らせて、
自分の皮肉を、おまえの狂態に混ぜ合わせるのだ！』と。〕
(悪の華——「死の舞踏」)

ボードレール独特の無機質を帯びた白色の戦慄的光彩である。彼以外の誰もそれ迄、かかる対象の前で、この様には書き得なかった。

骸骨を凝視することは、確かに胸苦しい。それが、衣裳を着け、ポーズをとられるに及んでは、尚更名状し難い嫌悪を感じる。それは明らかに我々の現在を悪意すらもって、覆し、その契来が閉ざさ

れる心地を覚える。(今におまえもこうなる)間違いなく、確定されていることが、最も嫌悪を感じる由である。普通、人はそこから目をそらさなくては、この世に生きて行けないとある本能的なものが、我々に教える。それというもの<おまえ(骸骨)の目の深淵が、怖ろしい想念に満ちており><人にめまいを吐きかける>からである。ここは神の宿りようもない境界である。

無明にも似て、無気味なこの現実の大襲来も、又、彼の強迫観念の一つであり、歴史上、心象史的に見れば、中世の「死の絶対」氾濫の、彼に於ける個人的再生であろう。ルネッサンスも大革命も、どうやら、詩人の意識の上べを通り過ぎて行っただけに過ぎない。しかし、中世人が、「死の舞踏図」を見て、恐怖に駆られて、神の信仰に走った事とは事情は本質的に異なる。<強者だけが、恐怖の魅惑に酔い得る>のだから、死を見ることは詩人が死を問題としなくなり、とらわれず、自由になって行く課程を示す。安心し救われたい一心の人間たちとも離れて、神の問題は、又、それとは別のことなのである。彼に、功利から来る苦悩は、一かけらもない。近代人の意識を持ちつつ、驚異に忠実に感じ入る人でなければ、次のような詩も、うたえる訳はない。彼はただ見たものをそのままうたっただけであり、骸骨が屍肉に変わっても、執拗に、繰り返されるのは、同じ驚異であり、神秘とも言える彼の夢幻の問いである。

〔恋人よ、思い出せ、私たちが見たものを。

いと爽やかな夏の、あの晴れた朝、
とある小径の曲り角、小石混じりの褥の上、
汚れきった一個の腐肉、

両足は宙にのけぞり、淫蕩な女の如く、
毒に汗ばみ、燃えあがり、
厚かましく、なげやりなさを見せて、
悪臭満ちたその腹を開いていた。

太陽は、その腐敗物の上に照りつけた。
それを程よく焼かんとする如く、
又、「大自然」に百倍にして返すためのように。
かつて、それが一体に結びつけた全てのものを。〕(悪の華——「腐肉」)

気絶しかかった恋人をよそに、この<爽やかな朝>、目撃した光景の意味を詩人は味わい尽くす。

〔大空は見事な残骸を眺めていた。
咲き誇る花でも見るように。〕

〔すべてのものが波の様に高まり、沈んだ。

或いはきらめき湧きあがった。

漠とした風に膨らみ、この肉体は、

増殖しつつ生きてるかとも思われた。

そしてこの世は異様な音楽を奏でた。

流れる水や風のように、

又、調子良く、^み箕の中で揺られ回る、

穀粒の音のように。〕

^{コレスゴングス}
万物照応により、醜く汚れた屍体が、みるみる内に四囲と融解し合い、風化して行き、詩人の眼前で動力を備えたある象徴となる。象徴が力である限り、彼は蛆虫や蠅や腐敗物の傍らに留まり、ごく自然に次のような最終節をうたうことができる。恋人がいつか、この汚物（腐肉）と化す時の情景を想像しながら、

〔その時には、美しい者よ！ 告げてやれ、

口づけしておまえを食い荒らす蛆虫に、

今では崩れたわが恋の、神聖な形と精髓は、

私が守り保っていることを！〕

ボードレールにとって、象徴化する能力とは、一つの純然たる覚悟であり、精神の強靱化であることが、この一節に何らの感傷性も付与しない。彼はただ人間の務めを語り、人間の宿命を見つめているのである。先の「死の舞踏」が虚無や死への冷やかな熱狂と共感をうたったものなら、この「腐肉」は詩による虚無や死の克服でもあろうか、（「耕作する骸骨」が死や虚無への反感、絶望であることは言うまでもない。） 恋人がかつて生きた日々の美しい姿の永久化を願い、救済を祈った詩のようにも見える。ボードレールに於いて、虚無や実際の死の中に、神は宿らずとも、詩が、一切を人間の悲劇的象徴へ向けて神の威光と肩を並び得る地位に迄高める、この不拔の審美家の倫理的な詩が、一人雄勁に思考している。詩への信仰とは人間理性への孤独な遵奉だろう。ここで再び彼の詩観と宗教観は正しく一致する。即ち、彼の宗教観が、通常のキリスト教徒の、疑いをさしはさまぬ神の顕現や実在とは一線を画するように、彼の詩作も、神を創造したと同様、自ら願求しつつ、厳しく創り出すものである。それは自我を信じたロマン派詩人のように、自然と流れ出るものではない。詩も神も共に、彼の必要性が造出したものである。それは、批判し、疑いつつも、天賦の想像力が遂に勝利をおさめる或る広大な戦いである。彼の神と詩精神が明瞭に紙背から漂うことこそ、仮象が実在へと変わるその

勝利の確かな証しではないか。

「腐肉」や「骸骨」を離れ、何よりも＜生＞そのものに属する、苦悩や、地獄の観念絵図に目を向けると、生彩は一際豊かであるが、更に、彼の詩を詩たらしめている悪のまばゆい色彩も又、大輪の花を開く。今度は彼は、神との充実した逃れようのない或る喜ばしい関連の内に、これらの理念——苦悩、地獄、悪、を際立たせるのである。ここでも彼は、神と戯れ、時に玩具のように弄ぶ、ロマン主義の群小詩人たちとは異なる²⁾。ボードレールは、自らの内部の奥深く創り出した、その神を逆に支配する。神の人間に対する効用を心得ている。何時如何なる時、神が現れ、どのような節度を持って接すべきか。苦悩の時、地獄を感じる時、悪夢のような首都パリで、赤裸な生活のさ中、周囲の容赦ない騒乱から、一人隔絶された時、神はすぐ傍らに來ている。しかし、高揚時と共に彼の魂の沈潜する生の地帯は、まだ他の一段水位の低い領域にも及んでゐる。そこに「下降の悦び」が醸成される。上昇への祈求の逆作用が発動する。

〔心が心を映す鏡となる

暗く透明な差し向い、

青白い星、一つまたたく、

明るく、暗い、「真理」の井戸、

皮肉な、地獄の燈台、

悪魔的恩寵の松明、

比類ない慰めと栄光

「悪」の中に在る意識は、！】（悪の華——「救い難きもの」Ⅱ）

救い難いものらを凝視する時、悪の中にいる意識が冴えわたる。それが、比類ない栄光であり慰めであることは何故か。彼がそう信じる、神の彼に遣わした役目、悪の領域の領主たる務めを、十二分に果たしている誇りなのか。……

〔一つの「思想」、一つの「形式」、一つの「存在」、

青空から発し、落ち込んだもの、

「天国」の如何なる眼も見抜かない

泥だらけの鉛色の「地獄の河」に。〕

〔一人の不幸者、爬虫類で充満した

ある場所から逃げようと

光と鍵を求めながら、空しい

模索の中で魔法にかけられた者。〕³⁾

〔一人の亡者、灯りも持たず、

手摺もない永劫の階段から、

臭気が湿った地底を告げる

ある深淵のほとりへと降りて行く。

そこはねばねばした怪物共が監視する、

燐光発する大きな眼持ち

夜を更に一層黒くませ

彼ら以外のもの見えなくしている。〕

「一隻の船、水晶の罫にかかったように、
極地の氷に捉えられ、
如何なる宿命の海峡を通して
この牢獄に落ち込んだかを尋ね回る船。」（同——Ⅰ）

「悪魔」が全て巧みに為遂げた、これら＜救い難い運命の完璧な光景＞を眺めて、一体感を味わい、愉悦を覚える。一方に神の目を意識するから、悪の悦びが背徳的な深まりの度合を強くして、燃え盛る道理である。（元来、不幸な者たちに対する彼の視線も、例えば「小さな老婆たち」等では、エロチックと名づけ得るほど迄達していた。）

これら亡者たちより、自分は少くとも、醒めた認識の刃を持つ優越感、一步間違えば、その罫に掛かり陥れられる所を、危く脱し得た安堵感、と共に恐怖の感情。そして彼らを抱擁しながら突き放している、奇妙な、己れの実存に関わる満足感。悪、地獄に溺れる彼らの心の欲情や動機、運命をも、手に取るように解説できることこそ、既に、悪を共有する、明瞭なしるしではないか。

一方、彼が業を共にせず、踏み止まり得るのは、卓抜な精神力の偉容さに加えて、悪の世界に於いても、彼が徹底的に孤独だからである。観照者と犠牲者の間に、詩中、厳然たる一線が画される。しかし、詩人の心情は、売淫そのものに他ならない。当然、そこは暗い悦びが宰領する。

悪の意識は、官能の中で、より息づく。＜堕ちて行け、堕ちて行け、憐れな犠牲者たち＞と、詩人は、悪の華詩篇中、「呪われた女たち」デルフィーヌとイポリットに向かい、その逸楽の報いとして劫罰を下す。だが同じく同性愛をうたった「レスボス」では、女たちに対して逆に親和な表情を向ける一面も見せる。＜恋は「地獄」をも「天国」をも冷笑するだろう。＞

情婦ジャンス・デュヴァルを象った、禁断詩篇では、その黒いヴィーナスの肉体への飽くなき耽溺と讃辞を連ね、自身の情欲のうねりに身を委ねる。（「宝石」、「忘却の河」等）。しかし、無題詩篇の数抄や「ラ・ベアトリス」等々では、おそらく、この女の低能で醜悪な正体、破廉恥で強欲な本性を弾劾する。悪——官能の持つ二面性をこのように、赤裸に扶り出すことが、悪の領主たるに不可欠の条件であると信じ、ボードレールはそこに生きる。

もう一つ、快い悪の意識の裏面に潜む、大事なもの、それは時代に対する彼自身の不断の防禦から来る。ブルジョワ社会の無意識の偽善に対して、まだしも、悪の光輝に染まることを栄誉とした。ボードレールの取った姿勢は、永劫の地獄堕ちさながら、一見、神から見棄てられた、と言うより、神を見放して見る態度である。その結末、詩人の晩年の悲慘については我々に何も言うことができず、神の威力を確かめ戦った結果であるとはいえ、複雑な問題が残る過ぎる。時代がこの混濁する近代社会の原型であれば、尚更、事情は容易ではない。

ボードレールの宿命、神々の問題こそ、十九世紀中葉に於ては、彼だけに独自の観念である。それなくしては自分を支えている、己れの行為を看視する、心の規範が消滅してしまう。悪への意欲、誇

りが萎えてしまい。単なる愚挙に落ち込んでしまう。それでは、フローベールを囿縛したと同じく当時の彼を幾重にも取り囲み圧迫する、ブルジョワ凡庸社会の拙劣な愚行に対し、^{イロニー}皮肉の毒味を注ぐ反抗が成り立ち得ない。彼の疎外され、懊悩を重ねて来た生涯が無意味と化す。時代、人間を相手の復讐が叶わない。それに第一、神が存在しなければ、彼の宿痼、身を食む虫、「神」に対する叛逆詩が書き得ない。——（『悪の華』の中には＜叛逆＞と題された章があり、「聖ペテロの否認」、「アベルとカイン」、「悪魔への連禱」の三篇が初版、再版を通して含まれている。初版のみにある序言の通り、作者はここで単に＜無知と怒りの推論を模写した＞だけに留まるのだろうか。こと序言が、官憲の追及を怖れて付された以上、神への叛逆詩を書いた作者の深意は測り難い。）——しかし、その反抗が瀆神の汚れた相を帯びず、無神論の乾いた風土に似ず、真摯な生命の火に赤々と燃える事実は、これを如何ともし難い。「虚無」さえ、厭い憎みながら、惹かれた彼ではないだろうか。汚辱もひとえに神あって故のことであり、生活の破綻も、心を狂わす苦悩の歴史も、悪の花々の美が冴え渡るのも、彼の信じ得た「神」なる者との大いなる、緊張関係ある故である。

「深淵」や「時計」の恐怖から例え逃れられずとも、ボードレールが生きる糧としたものは在る。不幸な者たちへの愛（群衆の享受）、神との交感、悲劇への憧憬（歴史への自己参入）、悪の戦慄、等々だが、そのどれをも支配する魂のメカニズムを探り、又、何よりも、その孤独な内面に触れることこそ、存在自体が稀有であり宝玉であるこの現代人には必要であると思われる。マトー、フレデリック、ジュリアン等、挫折した者を書き又、七欲大罪の表明書、聖アントワヌを書き続けた、異教の修道僧、フローベールの持ち札と、そこでは重なるところも多いようであるが、以下、稿を改めることにする。

<注>

- 1) フローベールも幼時、自宅の外科病院で、死体や病人を見つめた強い経験がある。
- 2) スタンダール、「ラシーヌとシェイクスピア」参照。（第二部手紙Ⅰ）ロマン主義とは何か。……「夢想的様式」や「魂の神秘」を開拓し、栄養も十分、裕福なのに、人間の悲惨や死の歓喜を歌うことをやめない、あの青年詩人たちの群団につきものの誇張された感傷、見せかけの感受性、もったいぶった優雅等々でしょう。……
- 3) こころ辺りを野太く書けば「聖アントワヌの誘惑」にも変わり得るだろう。

主要テキスト

- C. Baudelaire : Petits Poèmes en prose ; Garnier 1971.
: Les Fleurs du mal ; Garnier 1972.
: Mon cœur mis à nus ; Livre de poche classique 1972.
: Curiosités esthétiques, L'Art romantique ; Garnier 1971
- G. Flaubert : Trois Contes ; Garnier 1969.
: La Tentation de saint Antoine ; Garnier 1968.
ボードレール全集（Ⅰ～Ⅳ）：人文書院 1963
ボードレール研究：齋藤磯雄；東京創元社 1971